



妻に贈る散文短歌

片山 力

Katayama Tsutomu

私の短歌挑戦の動機は2つある。

その第1は、私の妻の肝臓癌破裂による急逝である。

そして、第2の理由は……

妻に贈る散文短歌

片山 力

# 目次

## 第1章 学習

はじめに ..... 7

1. 動機 ..... 14

2. 枕詞 ..... 22

3. 本歌取り ..... 34

4. 掛詞 ..... 45

5. 詩情 ..... 54

## 第2章 急逝から供養

1. 供養 ..... 62

2. 闘病 ..... 73

3. 臨終 ..... 76

4. 採骨 ..... 79

5. 埋葬 ..... 81

6. 惜別 ..... 83

### 第3章 趣味

1. 旅行

2. 登山

3. バレー

4. 園芸

5. 絵画

6. 音楽

### 第4章 性格

1. 冷静

2. 気配り

3. 品格

4. 交友

### 第5章 生活

1. 生活

2. 食事

3. 出会い

..... 91

..... 91

..... 96

..... 98

..... 99

..... 100

..... 102

..... 107

..... 108

..... 111

..... 114

..... 117

..... 122

..... 124

..... 130

..... 133

第6章 私の生き様 .....

1. 通勤 .....

2. 囲碁 .....

3. 老化 .....

4. 望郷 .....

第7章 両親 .....

1. 母 .....

2. 父 .....

3. 義父 .....

4. 義母 .....

第8章 孫 .....

第9章 連作 .....

おわりに .....

184 174 169 166 160 157 148 147 142 140 138 136 136

## はじめに

この歌集と思しき作品おぼの著者の名前をみて、私の人となりを知っている人は、先ず「ウツソー、ほんど？」と驚きの声を出すだろう。またある人は、「同姓同名の歌人がいたのかな？」と田中耕一さんの奥さん\*1と同様の疑問を持つ人もいるかも知れない。

そして、その次に「どういう理由で始めたのか」と問われるかもしれない。そして最後にこれは歌集と言えるのかと疑問に思うかも知れない。その最後の疑問には一応、この拙文を斜め読みして判断していただけたらと思う。

これらの最初の疑問に対して説明をする必要があるだろう。私の短歌挑戦の動機は2つある。その第1は、私の妻の肝臓癌破裂による急逝である。

私の時代の男が妻のことを褒めるのは、オノロケと言われ嘲笑の的になるし、男としての沽券に拘わるとして軽蔑されるのが落ちであるので、言うのは憚られるが、それを承知で敢えて言わせてもらう。私の妻真智子は、私の仕事中毒を支え、何事も任せられる正しい判断のできる優しい妻であった。妻の

\*1 田中耕一さんの奥さんは彼のノーベル賞受賞の緊急報道があったとき、「主人と同じ名前の人にノーベル賞をもらうような偉い人がいるんだ」と一瞬思ったと言っている。

趣味は私のネクラ趣味とは全く異なりスポーツウーマンでママさんバレーでアタッカーをやっていた。私達は趣味も行動規範も異なり、現代の若者感覚ではあり得ない夫婦であったが、それ程仲の悪い夫婦ではなかったと思っている。勿論、おしどり夫婦とは程遠いが、犬猿の仲という程でもない。晩年、偶たまに妻が計画する近くの登山やバック旅行について行った。良く言えばお互い世の中を達観した大人の夫婦といえるだろう。妻はC型肝炎に罹患し死亡する2ヶ月前の5月に2回目のラジオ波焼灼治療をしたが、至って元気で、肝癌破裂が見付かった7月1日も、私の車の運転では心配だといって自分で運転し、そのまま病院から帰らぬ人になった。私はガンに対する恐怖の認識が薄く、総て妻自身の対処が最適と信じていたので夫としては全く放置状況であった。妻の急逝後、相談相手にならなかつたことに対して自責の念に耐えられず、呆然自失の状況であった。何のために仕事をするのかという気持と仕事もしんどくなったので会社の常勤を辞退した。その気持を整理する積りで「妻の語録と私の独り言」と題する私の想いを整理し、妻への追悼作品を自費出版し、1年祭のときに親族に配布した。親族も喜び、妻への償いは多少出来たかなと思っている。しかし、それから2年を経てなんとなく詰まらない毎日で、このまま呆けるのも情けない気がしてきた。

また、妻の死後、読書の傾向が全く変わり、童謡等の多少感性に関する本を読むようになった。そこで考えたのが、俳句か川柳か短歌でも始めるかと思いついたのである。何故、短歌に決めたかというところ、短歌の愛好家には甚だ失礼であるが、短歌が素人には一番入り易いのではないかと思つたからである。俳句は17文字であるが、少ない字数に自分の気持を濃縮して入れるのはかえって難しいのではないか、

そして季語とか色々規則がありそうだ。

そして川柳は、その時を斜めまたは裏からみるセンスが必要だろう、時期を逃さず瞬間的に作るユーモア感性がなければならぬ。万事スローモーションな私は今まで表層的にしか物事をみていないので疲れるのではないかと、結局消去法で短歌はあと14字の言訳の理由が入られるから自分の感情が多少表現できるのではないかと思つた次第である。

第2の理由はボケ防止に良いのではと思つたのである。

いつも行く散髪屋のおやじさんが、「旦那を亡くした女房はかえって元気になるが、女房に先立たれた男は3年で痴呆になるから気をつけなさい」と忠告された。最近、物忘れが激しくなり、散髪屋のおやじの言うことが現実味を帯びてきた。

私は小学校の時から囲碁を知り、囲碁が唯一の趣味で、最近インターネット囲碁で毎日過ごしており、囲碁もボケ防止には多少効果があるだろう。しかし、囲碁は左脳の分担だと思ふ。右脳を鍛える方法として芸能や多少文化的な方法はないかと考えたわけである。そこで今年より短歌らしきもので忘備録にしようと思ひ、6ヶ月の「短歌の入門講座」に参加し添削指導を受けることにした。60の手習いならぬ73の手習いである。

一般に、和歌は万葉時代には長歌、旋頭歌、短歌を含んでいた。「長歌」の後に要約の積りや「返歌」